

岐阜県支部だより

○巻頭言

○支部研修会報告

- ・第1回研修会、夏季教育相談研修会
- ・学校カウンセラーコーナー

巻頭言「教育現場の変化に対応する必要性」

日本学校教育相談学会岐阜県支部 副理事長 郷田 賢

●20年間の教育現場の変化

今年度から岐阜県支部副理事長を務めることになりました。どうぞよろしくお願いします。

私が岐阜県支部の研修会に参加するようになったのは教員生活2年目の2001年のことでした。翌年の2002年に事例発表をさせていただき、さらに翌年の2003年から事務局として研修会の運営に関わらせていただくようになりました。

今回、巻頭言の執筆依頼を受け、この約20年間の「学校現場の課題や問題の変化」を、ある検索系AIに年代順にまとめてもらいました。すると以下のように回答がありました（一部抜粋・加筆修正があります）。

○2000年代初頭

- ・ゆとり教育の本格実施に伴い、学力低下への懸念が高まる。
- ・学校週5日制の完全実施により、授業時数と学習内容が削減される。
- ・「総合的な学習の時間」の新設により、学校・教師の裁量が拡大したが、運用に課題が生じる。

○2000年代後半

- ・学力低下問題が顕在化し、ゆとり教育への批判が高まる。
- ・特別支援教育のニーズが増加し、2007年度から特別支援教育が学校教育法に位置付く。

○2010年代前半

- ・ゆとり教育路線の見直しが進み、学習内容を増加する学習指導要領が段階的に実施される。
- ・いじめ問題や不登校の増加など、生徒指導上の課題が複雑化・多様化する。

○2010年代後半から2020年代初頭

- ・教師の長時間労働が社会問題化し、働き方改革が喫緊の課題となる。
- ・ICT教育の推進が求められ、デジタル機器やオンライン学習の導入が急速に進む。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響により、オンライン授業や感染対策等の新しい課題が浮上する。

○全期間を通じての継続的な課題

- ・特別支援教育の需要増加
- ・教育の機会均等
- ・学校と地域の連携強化

さらにAIは「これらの課題や問題の変化を通じて、日本の学校現場は教育内容の見直し、教職員の働き方改革、特別支援教育の充実、ICT活用の促進など、様々な課題に直面しながら変革を続けています。」と締めくくっています。

この回答を読んで皆さんはどのようなことを感じられるでしょうか。私は「全くこの通りとは言えないが、確かにこのようなことに取り組んできたな。」「毎時間の評価基準の設定の仕方の研修を受けたな。」「特殊教育から特別支援教育への変化は大きかったな。」など、20年程の間に教育現場は変化し続けていることを改めて感じました。同時に、一般利用可能なAIがこれだけの回答を瞬時に作成する時代になっていることも改めて感じました。このような変化は20年前には微塵にも想像できなかった世界ではないでしょうか。

●アップデートするための研修会

このような変化の中で、岐阜県支部の事例研で話し合われた課題は、どのように変化してきたの

でしょうか。過去の資料を振り返ってみると、岐阜県支部最初の事例研は1991年の「集団に適應できず、不登校の状態に陥ったA子に対する教育相談事例」でした。私が2002年に発表した事例は「教科における人間関係作り」であり、一番最近の事例研は「複雑な悩みを抱える児童・生徒への支援」となっています。これを見ると、いつの時代も不登校や学級不適應、いじめなど「学校生活が楽しいと思えない児童生徒」にどのように寄り添うかを考えてきたことが分かります。これは問題に対するアプローチのノウハウが少しも蓄積されなかったのではなく、児童生徒を取り巻く環境が変化し続けていることで、課題の要因が時代の変化とともに変化したり、増加したりするために、新しいアプローチを模索し続ける必要があったということだといえます。児童生徒に寄り添う私たちが最新の状態にアップデートしていなければ、すぐに寄り添う気持ちがあっても、寄り添うことが難しくなってしまうということです。

岐阜県支部理事会では、参加者が児童生徒に最新の状態で寄り添っていけるような知見を得られるよう、参加者自身がアップデートできる研修会を提供できるよう、内容や実施方法を工夫し続けています。

今から新しく知見を得たいという方はもちろん、これまでに教育相談の知見をもってみえる方も、ご自身の中で「不易と流行」の部分を整理し、自分自身をアップデートする気持ちで、研修会に参加していただきたいと思います。多くの方の参加をお待ちしています。

☆支部研修会報告☆

◆定期総会・記念講演会

開催日：令和 6年 6月 8日（土）

会 場：市橋コミュニティーセンター

◎記念講演会 14：00～15：45

多職種連携を通した心の支援システムの構築
～頼り合うことの壁をどう乗り越えていくか～
岐阜大学 教育学部准教授 松本 拓真 先生

松本先生は、“こころのげんき株式会社”とコラボレーションされ「ここあプロジェクト」を進められておられます。「ここあプロジェクト」では、目的の一つに「子どもと家族の心の問題は、医療・教育・福祉・司法・心理が連携してこそ支えていける」とあげられ、積極的な多職種連携、ネットワークの構築に取り組まれています。

先生はセラピストとして「子どもの心理療法」を専門にされています。「自分はこういうふうならできる。



こんなふうだったらやってみたい。」という自己理解を促す事に心理療法（精神分析的な心理療法）は、役に立つと話されました。

また、自殺予防の視点から「困難な事態、強い心理的負担を受けた時、自分のことをよくわかっていなければ『SOS』を出せない。」と自己理解の重要性に触れられました。「SOSの出し方教育」は、「SOS」を出すことだけでなく生徒同士が受け止められる「受け止め方教育」もセットで実施する事や、大学に進学したり社会に出たりした時に自殺率が上がる現状から、中学校、高等学校の「SOSの出し方教育」には、地域の方（市役所、保健師など）を招いて地域の資源を意識させる事などを学びました。

幼稚園教諭や保育士の方の現状も聞きました。「保育は子どもを正解に到達させるものではなく、答えがない。」「心の専門家がない環境なので“自分はこれでいい”と思えず、悩みを抱える先生が多い。」という事を知りました。松本先生の「自立とは、依存しないことではなく、依存先を増やすこと。ネットワークが大事です。」という言葉が印象に残りました。

最後に、理事長の平林先生から「支援する側もひとりひとりが抱え込むことなくSOSを出し、関係者同士で対応できる関係をつくっていくことを大切にしていきましょう。」と話されました。

（文責：佐々木 文枝）

◆夏季教育相談研修会

開催日：令和6年8月17日（土）

実施形式：対面・Web開催

日程：午前の部 10:15～11:45

：午後の部 13:15～16:45

講演『教室でできる児童生徒の関係づくり』

～スリンプルでかかわる力を育む～

かかわりプログラム Simple

代表 曾山 和彦先生



今の教育課題は、いじめ、不登校、学力、保護者。R4年のいじめ件数は、29万9千件、不登校は35万件。年々増え続ける背景には、自尊心

の低さが不適応を、スキルの弱さが不登校を、かかわりの少なさがいじめを生むとされている。

現代の子ども達は、かかわり体験不足で脳がしつけられていないために学級不適応（不登校&いじめ）や学級における気になる子に直結している。人が人になるには人が必要であり、かかわり力が重要であること。教師（集団を扱うプロ）や学校が最後の砦（かかわりの機会）である。

<学級づくりの理論・A. マズローの階層説>

学級づくりを通して自尊心&ソーシャルスキルを育てる。ルールを通して「安心・安全」を教師が与え、ふれあい（リレーション）を通して承認され自尊心が高まる。ルールづくりは、「ルール違反を見逃さない」「ルール遵守を見逃さない」ことが大切で、この2つのアンテナによる感知&対応が重要である。ルールを守らない子にユーメッセージではなく、アイメッセージで伝える。ルールを守っている子には、ユーメッセージで誉めていくとよい。もちろん、年齢や発達段階での配慮は必要であるが、注意・指示と誉め言葉を繰り返し、語りかける言葉はスリムにすることで「話を聴く」というルールと「かかわり力」が育ち、「人が育つ」につながっていく。

<ふれあいづくり・信頼関係>

ふれあいづくりは、縦糸（教師と子どもを結ぶ

糸）、横糸（子ども同士を結ぶ糸）を教師が紡ぐこと。子どもとの「縦糸」を紡ぐことのできる教師とは、①子どもの話を聴く教師（口は一つ耳二つ）、②子どもに声を届けられる教師（笑顔で楽しそうな表情、相手の目をつかむ、スリムな言葉かけ、丁寧に名前を呼ぶ）などの2つである。子ども同士の「横糸」を紡ぐ教師とは、かかわり（スリンプル・プログラム）を教育活動で実践していくこと。

この「縦糸」「横糸」を織り上げることがふれあいづくりであり、「かかわりが人を癒し、かかわりが人を育てる」と言えることがキーポイント。

<スリンプル・プログラム・〇〇タイムの型>

子どもにも教師にも負担なく、誰でもできる10分間の〇〇タイムは、2つの教育技法で構成される。「行動」の教育であるSSTと「感情」の教育であるSGEを組み合わせる共通な型で教育活動を行うことで、ゆっくりだが確実に効果が表れる。

スリンプル・プログラムは漢方薬であり10年で文化となる（スリンプル先進校17校）。支える集団をつくるのが、その子を変えていく。同じ型で教師が丁寧にやり、ゆっくり支えていくことが教育課題の解決・改善につながる。子どもを見捨てない、あきらめないことが教師の専門性であり、スリンプル効果につながる。SSTの骨子は、山本五十六の言葉そのもの。「してみせて、言って聞かせて、させてみて、誉めてやらねば、人は動かじ」。SGEは、エクササイズとシェアリングの2本柱。〇〇に気付いた、〇〇を感じた等、個々の気付きを促すシェアリングが大事。体験だけで終わればレクリエーションと一緒に。シェアリングをすることで、体験から経験に変わり、生きる知恵となる。

<まとめ>

今回の研修では、教育課題の解決・改善のために曾山先生の関係づくり「スリンプル・プログラム」の具体方策を学ばせていただきました。

演習を交えての講話では、曾山先生の志である「幸せな学級学校を創る」ための具体方策「スリンプル・プログラム」を楽しく分かりやすく学べたことができました。また、「全校一枚岩」で意図的に意識的に働きかけを行わない限り、子どもの「かかわりの力」は育たないことを実感できた充実した研修会でした。（文責：曾我部恵美）

【参加して下さったみなさんの声】

- ・自分の経験や考えとすりあわせながら聴いていました。共感できることが多く、今後も意識して取り組んでいきたいことがたくさんありました。

「こっちの正論を言っても仕方ない、こちらが変わらなければ・・・」という先生の言葉が心に残りました。今までの当たり前が当たり前でなくなりつつ現在（いま）だからこそ、**かかわりの力**を学校で教えていく必要があるのだと思いました。また、ルール順守への声かけ等、ほめのシャワーを増やすためにも、自分自身の言語環境の見直しが必要だと感じました。

簡単に誰にでもできるSST+SGE。有効な教育活動であることは理解しているし、実践もしているのですが、なかなか継続して行うことが難しいです。組織で（一枚岩で）取り組むことが、子どもの姿の変容につながるのだと感じました。

- ・SSTとSGEを組み合わせたスリンプル・プログラムは長い研究、実践に裏付けられたものであることがよくわかりました。中学校区で一体感をもってできるのがすごいです。（中略）チーム学校、コミュニティスクールで考えられるといいと思いました。

- ・理論や実践を大変わかりやすく教えていただけてとても興味深く聞けた研修であつという間の一日でした。**教育のプロとして、時代に合わせて学んだことをアップデート**して子どもに返していける教師でありたいと思います。

- ・大学で今学んでいますが、学級・学校での人とのかかわり方について今回より考えることができました。アドジャンは実際に試してみても楽しく、教師になることができたなら、ぜひ取り入れたいなと思えました。

曾山和彦先生の著書より

子どもを応援するための

特別支援教育（北樹出版）

現場を熟知する執筆陣が、具体的な事例や対応策を子どもの育ちのより良いつながるように解説した実践の書。具体的事例、指導案の掲載、QRコードによる解説動画も視聴できる。教師及び、子どもに関わる人すべての必携書。



日本学校教育相談学会岐阜県支部会報第33号
(2024年10月5日発行)

発行：日本学校教育相談学会岐阜県支部
編集：日本学校相談学会岐阜県支部広報委員会
ホームページ：<http://jascg-gifu.net/>

☆☆☆ 学校カウンセラーコーナー ちょっと一息「おすすめの本」☆☆☆

どんなことから立ち直れる人 逆境をはね返す力「レジリエンス」の獲得法

加藤諦三《早稲田大学名誉教授》著（PHP 研究所）

最近街角でめっきり見なくなった本屋さん。その本屋さんにも何のあてもなく入って、立ち読みして出会った本がある。その一冊がこの本。40数年前の私の大学時代から、著者の本は読んでいる。現在著者は86歳だが、今だに元気に本を書き続けている。勿論、ラジオの「テレフォン人生相談」のパーソナリティを今でも務めている。いつもの名言から番組は始まる。この一言で落ち着く。人は少し疲れた時、人の言葉で心がいつもの自分を取り戻すことがある。目次を見て、気に入った項目のページから読んでみる。どこを読んでも5分で読める。是非、ご一読を！

学校カウンセラー 平林 克友

